

限られた視界——豊島与志雄が見た1940年の上海

張 鈴

はじめに

上海は幕末から現在にいたるまで、つねに日本人の関心を集めてきた。「日本人の上海イメージ」についての研究も二十一世紀に入ってしだいに盛んになってきた¹。しかし、そのような数多い論文も、日本部分的占領期(1937-1941)²の上海を巡ってはあまり言及していない。その理由として考えられることは、まず戦時下日本文壇の活動自体が「甲斐のない多忙」³と低く評価されていることである。次に、当時の知識人たちの多くは従軍記者、現地記者として上海に滞在するか、もしくは汪兆銘偽南京政府を通して上海に来ていたということである。従軍記者の立場は言うまでもなく軍部と深い関係を保っていたが、現地視察・訪問のかたちで上海に来た知識人たちも、汪偽政府によって接待されていた。そして後に中日文化協会(1941-1945)が成立してからは、来訪者の接待は「一応文化交流の範囲とすれば、当局名義で接待するのは都合が悪く、文化協会に押し付け」⁴られた。ゆえに、多くの日本の知識人は上海を訪れても、現地の日本人、あるいは彼らを通じた中国人としか交流できず、見られたものはある程度限られていた⁵。そこで、小論は、豊島与志雄が1940年3月の上海訪問後に著した紀行文、「上海の浪面」⁶をめぐる分析を通して、日本部分的占領期における日本知識人の上海訪問の側面を考察したい。

筆者が豊島与志雄に目を向けるようになった契機は、彼に対する「オールドリベラリスト」⁷や「インターナショナリスト」⁸という評価と、戦後の「日本中国友好協会」(略、日中友好協会)⁹の副会長(会長空席)という肩書きである。戦前、上海を含む中国の大地を踏み¹⁰、戦後になって内山完造等の人々と共に積極的に日中友好運動に身を投じた豊島の上海認識は、必ずや検証の価値があろうと思われるが、いまだあまり注目されていない¹¹。また、日本部分的占領期の上海はアメリカの経済的援助を受ける重慶国民政府と、旧ソ連との緊密な関係を保つ中国共産党と、日本軍部の傀儡政権にあたる汪偽政府、さらに二つの租界政権の激しく争う場¹²でもあり、まさに中国の縮図であったとも言える。したがって、豊島の上海認識と現実との食い違いを明らかにし、彼の視線がどこまで届いていたかを追究することは当時の日本知識人の上海理解の限界を知る上で意義深い。

1

その中には、上海を日本の近代化の起爆剤とみる劉建輝の『魔都上海 日本知識人の「近代」体験』(講談社、2000年)や、上海で活躍していた作家の足跡を述べる趙夢雲の『上海・文学残像—日本人作家の光と影』(田畑書店、2000年)、日本作家の筆の下の上海をテーマにする木村泰枝の中国語博士論文『西方・日本・中国—日本人的「上海夢想」』(中国復旦大学文学博士論文、2008年)、通時的に日本人の上海への目線に注目する徐青の博士論文『近代日本におけるシャンハイ・イメージ 1931～1945』(名古屋大学博士論文、2009年)などがあげられる。『魔都上海 日本知識人の「近代」体験』は2010年8月、筑摩書房により増補版が出たことが、「日本知識人と上海の関り」という課題の注目度の高さを物語る。

2

後で詳しく説明するが、日本は1937年第二次上海事変(八・一三淞滬抗戦)後、租界区域を除く上海を占領した。そして、1941年太平洋戦争勃発してから、日本は租界に進駐し、1945年まで全面占領していた。本文は便宜をはかり、1937年11月から1941年12月までの上海を日本部分的占領期という。そのあいだは中国語では孤島時期とよく呼ばれる。

3

五味淵典嗣 「甲斐のない多忙—戦時下日本語文学論序説」、『文学』第11巻第2号(岩波書店、2010年)P153。

4

趙夢雲 「「中日文化協会」に関する初歩的な考察—上海分会を中心に」、『植民地文化研究』第4巻(植民地文化研究会、2005年)P235。

5

加えて、上海の虹口地区には日本人社会が作られていた。現地の日本人がそこで生活するには外国語である中国語を勉強する必要もなく、中国人との相互の影響が相当限られ、中国人とのやりとりをする必要もなかった。(安克強(Henriot Christian)著、邵建・中国語訳「上海的“小日本”:一個与外界隔離的社區(1875-1945)」熊月之等(編)『上海的な外国人1842-1949』(上海古籍出版社、2003年)P181) 現地訪問者はこのような人々を通してなにをみられたのかが、さらに疑問になると思われる。

6

豊島与志雄の「上海の浪面」、初出は『改造』(改造社、1941年5月)、後に『上海』(谷川徹三 三木清 ほか 共著)(三省堂、1941年 大空社による復刻、2002年)に所収。

7

関口安義 『評伝 豊島与志雄』(未來社、1987年)P253。

花田清輝「解説」、『豊島与志雄著作集 第四巻』(未來社、1965年)P492。

永淵道彦の「火の会、ペンクラブ、日中友好協会のこと——豊島与志雄・戦後覚書」(『豊島与志雄への測鉛』(花書院、2005年))によると、日中友好協会準備会は中華人民共和国成立する1949年10月、内山完造が世話人として発足した。1950年1月の発起人総会で、豊島は四人の副会長の一人に選ばれ(会長空席)、内山が理事長に選ばれた。

豊島与志雄は1940年3月～4月、谷川徹三と加藤武雄と上海及び周辺都市を見た。そして1941年の9月、内山基と青島、濟南、北京を回り、1943年10月に阿部知二と上海、南京へ旅行した。また1944年には第三回大東亜文学者大会への出席で南京や上海に行ったが、戦後は中国に行ったことはない。

豊島与志雄研究は『豊島与志雄著作集(全六巻)』(未來社、1965年-1967年)に付けられた紅野敏郎などの解説、著作目録と年譜や中村真一郎の『近代文学への疑問』(勁草書房、1970年)にある豊島評価など基礎的な研究がある。その後は関口安義の『豊島与志雄研究』(笠間書院、1979年)と『評伝 豊島与志雄』(前掲)と永淵道彦の『豊島与志雄への測鉛』(前掲)が挙げられる。永淵道彦は『豊島与志雄への測鉛』で戦後の日中友好協会について調べたことがあるが、戦前の活動については触れていない。一方、豊島童話についての研究は中野隆之の『豊島与志雄童話の世界』(海鳥社、2003年)と永淵道彦の『豊島与志雄童話の世界』(花書院、2009年)がある。

当時、上海は日本軍によって陥落したが、蒋介石重慶国民政府と共産党は暗殺活動を含む水面下の活動を行っていた。

高橋孝助・古厩忠夫(編)『上海史—巨大都市の形成と人々の営み』(東方書店、1995年)P37の情報に基づく。

同上、P229。

和田博文等『言語都市・上海—1840-1945』(藤原書店、1999年)P182。

高田博文(編)『戦時上海 1937-45年』(研文出版、2009年)P7。

1. 上海租界小史

アヘン戦争に敗北した清政府は、上海を含む五つの都市の開港を承諾し、上海にはイギリス租界(1845年)・アメリカ租界(1848年)・フランス租界(1849年)が相次いで画定された。1863年には、アメリカとイギリスの租界が合併され、共同租界をなした。1846年の議定では、イギリス租界のエリアは南の洋涇浜(今の延安東路)、北の李家場(北京東路)、東の黄浦江・西のバリア・ロード(河南中路)までで、アメリカ租界は1848年、蘇州河以北の虹口一帯に位置づけられた。フランス租界のエリアは1849年南の城壕(人民路)、北の洋涇浜、西の関帝廟諸家橋(西藏南路の近く)、東の広東潮州会館がある水路沿いの洋涇浜の東の角(竜潭路)までで、上海県の城外北部を取り巻くように設定された¹³。租界は自治で、共同租界には工部局、フランス租界には公董局という治安維持などの政府機能をもつ行政部門があった。さらに租界以外の地域、いわゆる「華界」を管理する清朝の上海県政府を加え、三つの政府が共存していた。清朝が減んだ後、上海県政府は「上海市政府」によって引き継がれた。三者の境界は協議で決められたが、実際には、租界隣接地や租界外に道路・公園・運動場・娯楽施設を作ることも認められていたため、工部局は絶えず西へ「延長道路」を築き、中国人のナショナリズムが高揚する1925年まで、実際の共同租界は何十キロも伸長、拡大し、租界東北側にある閘北の北四川路一帯も不法占領した¹⁴。

1937年、上海にて第二次上海事変(八・一三淞滬抗戦)が勃発し、中国と日本は全面戦争に突入した。日本軍は英米の統制を打破して蘇州河以北の共同租界を占拠し(便宜を図り、本稿では虹口日本占領区という)、さらに「華界」の市役所である「上海市政府」をも占領した。その後まもなく、11月に租界以外の地区は全域日本軍によって占領された。その後、「上海市政府」の名称は上海市大道政府(1937年)、上海市政督弁公署(1938年4月)、上海特別市政府(1938年10月)など、目まぐるしく変化していた。日本色のないように見えるが、いずれにしても日本と密接な関係を持っていたと考えられる。そして、1941年太平洋戦争勃発後、日本軍は租界に進駐し、上海を全面占領し、租界の百年の歴史が幕を閉じた。その後、旧租界地域は汪偽政府に「返還」された。

豊島与志雄が訪ねた1940年3月の上海は、一部の旧共同租界と旧「華界」からなる虹口日本占領区(上海特別市政府の管理下に置かれる)・共同租界・フランス租界という三つの部分に分けられ、蘇州河が虹口日本占領区と共同租界の境となっていた。加えて、蘇州河にまたがるガーデンブリッジの端にはイギリス軍隊と日本軍隊が対峙していて、中国人は証明書がなければ、中国の土地にかけた橋を渡ることさえできなかった¹⁵という。

1941年まで中立をある程度保つことが可能であった租界は、重慶国民政府に繋がる中国側の企業の活動や『文匯報』のような新聞の言論の自由を不十分ながらも保護して、抗日の根拠地に相当する役割を果たしていた。それに対して日本側は経済封鎖と同時に占領地内部の物資流通に厳しい統制を実施した。その結果として、上海租界には逆に「ヒト・モノ・カネが押し寄せ、経済活動拡大のためのあらゆる条件が整って」、上海租界が「孤島繁栄」と言われる「戦前以上の繁栄をみせ」た¹⁶。

2. 豊島与志雄の上海への目線

2.1 上海に行くきっかけと足跡

豊島与志雄は1940年3月に、中国のある要人の「向ふの文化人達に出来るだけ会つて向ふの様子を見てほしい」¹⁷という要請を受け、また「当時日華文芸協議会というようなものを作ろうという話があり、その下相談・瀬踏みのために」¹⁸谷川徹三、加藤武雄とともに訪中した。案内役を務めたのは中国文学者齊藤秋男である¹⁹。3月6日に東京を離れて上海へ、3月20日に上海から離れて揚子江沿岸の都市を回覧し、3月30日の朝に上海に戻った。その翌日の夜、三人は友人の三木清と会い、数日後帰国の途につき、日本に到着したのは4月10日であった。訪問した都市は上海、蘇州、鎮江、揚州、南京(そして上海に戻る)という順番で、上海に滞在した日数はせいぜい二十日だった。ただし、上海滞在中、彼らはただ観光だけをしたのではない。三人の紀行文をまとめて見ると、上海自然科学研究所の上野太忠という人物の斡旋による(齊藤秋男の回想によると、同研究所の研究員である陶晶孫も斡旋してくれた)中国知識人との面会や、汪偽政府の要職を務めている趙正平や周仏海との会見など、過密なスケジュールであった。

帰国後、谷川は「中国知識人の動向」というタイトルで、1940年5月8日に東京にある東亜研究所で報告をした。当の報告は後に『上海』(前掲)に収録された。この報告では、中国知識人間の話題や中国教育界の状況などが多く述べられる²⁰が、「日華文芸協議会」については全く触れられていない。

そこで筆者は「日華文芸協議会」を調べたが、成果が得られなかった。「日華文芸協議会」という名前から、1940年7月南京で発足し、1941年1月上海に分会が置かれた「中日文化協会」のことではないか、と推測する。

趙夢雲の研究によれば、中日文化協会は、汪偽政府が成立してから三ヵ月後に日本大使阿部信行陸軍予備役大将を強力なバックにし、1940年7月11日の中央政治委員会で褚民誼によって提案、可決され、同7月28日発足した。その準備は「約半年前の1939年冬頃、設立の準備に着手、上海でそのための下相談が持たれ、計四回会合を経て、趣意書と章程が起草された」²¹。中国側から提案したといっても、「日本政府の強い後ろ盾を背景とした機関」²²という実質は変わらない。豊島らが上海に赴いたのは、四回の下相談のうち一回と考えても、時間的にはつじつまが合う。

以上のことから、豊島たちは従軍記者などの肩書で上海に赴いたのではないが、単なる回覧ではなく任務をもっていったと推測される。

筆者は彼の足跡を追うために、「上海の洪面」に現れる地名を整理した。租界中央の競馬場；黄浦江岸バンド；競馬場とバンドの間の支那街路；南京路；南京路辺；北京路辺；メトロポール；北停車場；シロス；新世界；大世界；西部のジェスフィールド公園；パークスの銅像；永安公司；麗都；支那第六泉の井戸(静安寺；筆者注)；ハリウッド(以上共同租界)、四川路あたり；南北四川路；日本占領区域内；長春里；北部の新公園及び極東オリンピックの跡；南北四川路をつなぐ橋；楊樹浦(以上虹口日本占領区)、

17
谷川徹三 「中国知識人の動向」、『上海』(前掲)P187。

18
関口安義 『豊島与志雄研究』(前掲)P214。

19
佐藤竜一 『日中友好のいしずえ一草野心平・陶晶孫と日中戦争下の文化交流』(日本地域社会研究所、1999年)P141

20
谷川の報告の内容は上海自然科学研究所刊行誌『中国文化情報』と重なる部分が多い。この点については別稿で述べたい。

21
趙夢雲 「『中日文化協会』に関する初歩的な考察——上海分会を中心に」(前掲)P225-226。

22
杉野元子 「南京中日文化協会と張資平」、『芸文研究』第87巻(慶應義塾大学文学会、2004)P258。

蘇州河；ガーデンブリッジ（以上共同租界と虹口日本占領区の境である河とそれらを繋ぐ橋）、ハイアライ；ジョッフル街（以上フランス租界）が挙げられる。「上海の浚面」の文中に頻繁に現れる「南京路」、「四川路」及び絶えず意識される「蘇州河」、河の「向こう」（租界：筆者注）などの地名からみれば、豊島は実際には、主にガーデンブリッジが繋ぐ共同租界と虹口日本占領区域を往来し、わずかにフランス租界にも足を運んだが、日本占領下の旧「華界」にはあまり足を踏み入れなかったことがわかる。

2.2 上海に対する認識

2.2.1 上海の民衆を注視する

豊島は上海にいる人々の生きるための忍耐力、集中力の強さに感服したようだ。「隣家の裏口の洗濯の音が、教室内にまで遠慮なく飛びこんで来」ても平気に勉強している子供、「路街の壁に立てかけた掛枠に草双紙類がずらりと並んでる周囲に」、「僅かな料分でその貸本を借り、自動車や黄包車や通行人の雑沓のなかに街路に屈みこんで、一心に読耽つてる」（92頁²³）子供から大人までの人々、「拳銃を手にして駆けてゐる工部局警官の姿」に「あまり振向きもしない」（91頁）行人、「難民区に於て、薄暗い小屋の中でマージャンの牌を弄んで」「公然と数銭の金を賭けてゐる」（95頁）難民たち、客が来ると一斉に客の荷物をむりやり引っ張っていたが、選ばれなかったら「一抹の未練気も示さない」（94頁）苦力たち……「大衆は極端に現実主義で個人主義で、自己の周辺についてさへ冷淡で、政治などには殆んど無関心である」（96頁）という語句でまとめて、彼らを理解しようとする努力を示したものの、理解する術がなかったようだ。

彼がスケッチした上海で生活をする民衆たちの姿は、ほぼ歴史上の事実合うと思われる。

上海語では、他人事は「閑事」といわれ、暇（「閑」）があってから注意を払う事、という意味である。当時の上海の民衆はみな、食う・生きるので精一杯で、他人のことに関心を向ける暇はなかった。それに、テロ事件が日常事と見なされるほど頻繁に発生していた。例えば、重慶国民政府に属する軍事秘密警察のトップである戴笠の支配により、1937年8月から1941年10月までの4年間に、上海で150回もの暗殺事件が起こされた²⁴。他人事、特に政治に関心を示すと、テロ事件に巻き込まれる恐れがあった。

このような人々に囲まれて、豊島が「窒息しさうな幻影に囚はれることがある」（93頁）と感じていてもおかしくはない。これは、豊島が日本人の間の情報交流に満足しておらず、さりとて自分で実際の状況をもてなかなか把握できないからこそ抱いた感慨ではないか。そこから、豊島の熱い気持ちが理解できるであろう。

2.2.2 上海の知識人との面会

豊島は上海の民衆を外部から比較的客観的に見ることができた一方、上海にいる知識人たちの状況に関しては全面的な把握はできなかった。むしろ、日中戦争の最中の日本人という立場は豊島の上海知識人に対する全面的な理解を妨害した。豊島は知識

23

以下、豊島与志雄「上海の浚面」『上海』（前掲）からの引用頁は（ ）内に記す。

24

魏斐德 (Frederic Wakeman) 著 芮伝明・中国語訳 『上海歹土—戦時恐怖活動と都市犯罪 (1937-1941)』(上海古籍出版社、2003年) P23。

人と面会したとはいえ、中国との交戦状態のさなかに、中国で傀儡政府を立てた日本側の国民として、傀儡政府と侵略協力機構である上海自然科学研究所の職員の斡旋で知識人と面会したのである。そのため、豊島が会うことのできる知識人は限られた。この一部の知識人を通して、全面的・客観的に上海の知識人を凝視することはできなかった。この点について、彼は自覚できなかったようである。

豊島が認識しているのは、「現在上海には、思想文芸の能才は甚だ少い。多くは奥地に遁入してしまつてゐる。市内に潜んでゐる者は之を見出すこと容易ではない」(97頁)ということである。豊島は何人かの知識人と面会した。しかし、豊島と接した知識人たちは皆あいまいな態度を取り、本音を心の奥底に隠したのである。

新支那中央政府の要人たる傅式説氏や趙正平氏などを中心とする文芸科学社関係のグループや、中華日報や新申報への関係の人々を除いては、たとひ和平派に心を寄せ東亜新秩序建設に志ある人々でさへ、表面上灰色の態度を取らざるを得ず、日本人と会談することなどは甚だしく警戒する。

……(引用者による省略)

某シナオリ作家は、自然に自分の名前が知られるのを待つだけで自ら名乗らうとはしなかつたし、同じく氏(文中の「A氏」を指す:引用者注)の所で私が偶然同席した頼もしげな一青年は、互の姓名を知り合ふことなどには全く無関心な態度を取つた。数名の大学教授や文学者などと私達がひそかに会話し得たのも、彼等の間に信望のある自然科学研究所の上野太忠氏の斡旋に依るものだった。(96頁)

その時の上海自然科学研究所は、既に日中戦争以前の上海自然科学研究所ではない。義和団賠償金還付の「対支文化事業」(1923年スタート、後「東方文化事業」と改称)の一環として、上海自然科学研究所は1931年、フランス租界(今の徐家匯の近く)に設立された。そもそも中日提携の科学基礎研究を行う計画だったが、1928年済南事件・五三済南惨案で中国人委員が全員、委員会から退出して、上海自然科学研究所は事実上日本人による単独運営となった²⁵。そういういきさつがある当の研究所は常に中国人からの不信の目線を浴びていたのも当然のことだが、所属する人々は日本のためだけに努力するのではないということを証明するためにも頑張っていた。特に第二任所長代理²⁶新城新蔵がいる間(1935～1937)は、彼の「日支提携」という座右の銘に象徴されるように、日本人研究員の中国語勉強や中国人研究員の日本語勉強が奨励されていた。そういった雰囲気の中で、蔡元培、魯迅、胡適のような中国の著名な文化人から、日本の左翼知識人尾崎秀実、またノーベル物理学賞受賞のデンマーク人ニールス・ボーアまで、科学者だけでなく、各種の知識人が上海自然科学研究所を訪問していた²⁷。しかし、1937年日中戦争が勃発してから、上海自然科学研究所は日本側の批判を受け、1938年2月からは「これまでの名ばかりの日中共同運営を完全に放棄し、事業全般を外務省の直営に改め、その建物、財産を国有財産に編入するとともに、東方文化事業総委員会、同上海委員会ならびに上海自然科学研究所などを全て在北京日本大使館の命令系統のもとにおくこととした」²⁸。豊島が上海を訪ねる1940年、

25

委員会の中国人が全員退出しても、研究所には中国人研究員やボーイが多かった。文学者でもある陶晶孫は、当研究所で研究員を務めながら、潘漢年を通して水面下の共産党となんらかの関係を保っていた。

26

「上海自然科学研究所組織大綱」によって所長は中国人に任せるべきだが、1928年、済南事変(五三惨案)後、中国委員会は全体退出したので、日本人によって所長を代理していた。のちの1936年1月、「所長代理」という肩書きを「所長」に変えた。(梁波、翟文豹「日本在中国的殖民機構—上海自然科学研究所」、『中国科技史料』(第23巻第3期、2002年)による。)

27

佐伯修『上海自然科学研究所—科学者たちの日中戦争』(宝島社、1995年)第十章 崎人・文人交遊録に参照。

28

李嘉冬「新城新蔵と日本の東方文化事業—上海自然科学研究所長時代の活動を中心に」、『京都大学大学図書館研究紀要』第8巻(2010年)P30。

29
同上。

30
1941年後事務所が庶務課に変わり、上野は庶務課主事を務めた。佐伯修『上海自然科学研究所—科学者たちの日中戦争』（前掲）P177。

31
南京の図書接收は満鉄大連図書館のプロ、東亜同文書院と上海自然科学研究所の「漢籍専門家」たちが参加した。敵紹鑑『漢籍在日本的流布研究』（江蘇古籍出版社、1992年）P196。

32
上海市档案馆（編）『日本帝国主義侵略上海罪行史料匯編』（上海人民出版社、1997年）P608。第一区とは、旧租界及びその周囲部分。同書、P606。

33
文芸界抗日救亡協会は1937年7月28日、上海で成立された。それは豊島が述べたように「八・一三事件後」（豊島はここで中国側の呼び方で第二次上海事変をこう呼ぶ）ではなく、その前のことである。一方、重慶国民政府系の中華全国文芸界抗敵協会（略、文協）は1938年3月漢口で結成し、全国に及んだ影響があった。

34
薛林榮「内山書店始末」（『人民政協報』、2007年4月5日）。

上海自然科学研究所はすでに「対中国中央機関として設立された興亜院に移管されていて、完全に日本の国策を実行する機構になって」いた²⁹。

なお、上野太忠という人物についても、不明な点が多い。1940年以前に上海自然科学研究所では事務所主事代理³⁰を務め、上海自然科学研究所が発行する中国文化総合情報誌の『中国文化情報』や科学研究論文集『上海自然科学研究所彙報特刊・中国鉱産地一覽』の発行人を担当した。図書分類の知識をある程度持つと思われ、所長新城新蔵と共に陥落地南京の貴重な図書の接收に参加した³¹。汪偽政府が租界を接收してからは、「第一区公署教育処の副処長」³²を務めた。しかし、上海自然科学研究所創立時の開所準備メンバーリストには名前の記載がなく、科学者ではないためか、論文集『上海自然科学研究所彙報』の著者としても姿がみられない。

上野太忠などを通して豊島が会えた人々は名前が詳述されていないため考察は難しいが、群像としてはこう描かれた。

彼等は何かしら憂鬱さうである。私達と会談しても、どこか心の扉を閉している様子があり、日本に対する不満の点さへも明らかに口にしなない。その心境には孤独の影がさしてゐるらしい。過去の信条が崩壊して未だ新たな確信を掴みきつてゐない悩みもあらう。（96頁）

それに加えて、会えなかった人々の情報からも、次のように推測している。

嘗て八・一三事件後、文化界救亡協会というのが共産黨員によつて作られてゐたが、文化人の輿地への遁入甚だしいため、新たに国民党系の人々によつて文芸界救亡協会といふのが結成され、その発会式には両派の激しい抗争があつたさうであるが、それらの人々も今は求むる術がない。また嘗て魯迅と親交がありその一派から親しまれてゐた内山完造氏の周囲には、上海在住の文芸愛好者達から成る芸文会という集まりがあるが、その会合にも今は殆んど中国人の出席を見ないさうである。（97頁）

いわゆる「文化界救亡協会」と「文芸界救亡協会」は恐らく「文芸界抗日救亡協会」と「中華全国文芸界抗敵協会」³³のことであろう。「抗日」や「抗敵」という抵抗の立場を示す言葉の省略は、恐らく現地の知識人によって行われたと思われる。「共産抗日」、「抗日救国」などのスローガンを平気で紀行文に書きこむ豊島の立場から考えると、「抗日」をここでわざわざ省略するわけがないのである。その省略からこそ、彼の情報のもとになる現地の知識人が、少なくとも日本と対抗する立場に立っていないことが分かるであろう。

ただし、「芸文会」とは、1922年内山書店で発足された「文芸漫談会」（略して、「漫談会」とも言われる）である。「文芸漫談会」は、中国側の参加者には郁達夫、田漢など日本留学をきりあげて帰国した青年文学芸術家が、日本側には上海に住んでいたかまたは上海を訪ねた有名な文化人がいた。参加者が政治、文藝などの問題について自由に交流し、優れた文化的対話が行われたのは二、三十年代の上海には珍しい³⁴。1939年11月ごろに、「文芸漫談会」は「上海芸文会」に改名し、1940年1月

と4月、日本倶楽部で例会を催したことがある³⁵ことは当時唯一の日本語新聞「大陸新報」によって知らせた。1940年4月の例会の前に上海を訪問していた豊島が妙に消息に通じているように見えるが、斡旋役の陶晶孫がよく内山書店に通うことからすれば、正確な情報を早く得られるのもおかしくない。

正確な情報と間違った情報が混ざっていることが分からず、豊島は「何かしら憂鬱さう」な知識人が上海の全ての知識人を代表しようと信じてしまった。

当時の知識人の間に流行っていた孤島という単語を教えたのも恐らく、それらの知識人の誰かだろう。しかし、その単語を知ることによって、さらに彼は上海の知識人と心を通じあえたという錯覚をもってしまったのである。

2.2.3 租界への目線

豊島は租界に暮らす上海の知識人の心境を想像しながら、租界を眺めた。

彼等の多くは、共産抗日の波濤をくゞりぬけて漸く頭を水面上に持挙げたばかりのところである。そして彼等の眼には何が映ずるであらうか。

蘇州河は、重慶政府のテロから身を護るためには越え難い一種の境界であらう。バンドに立並ぶ高層建築は、欧米勢力の重圧と感ぜられるであろう。それに対抗すべき浙江財閥の富は、主人公の逃避と共に活動を停止しているものが多からう。ジョッフル街のうまい菓子や珈琲は食べ得ても、たまに麗都やシロスやハリウッドなどにはいりこめば、その一流美人のダンサーは他国人とばかり踊つてゐて、却つてこちらが異邦人の感があるだらうし、キャバレーの美酒も何となく舌ざはり悪い感があるだらう。幼な心には馴染のありさうな新世界や大世界も、今ではもう俗悪極まるものに思へるだらうし、南京路の各百貨店の娯楽場も同じく俗悪に思へるだらう。そして周囲は、精神的に一種の感覚遅鈍な大衆の群れである。斯くて彼等の胸には、文化的「孤島」上海の感が響いて来るに違ひない。(98頁)

蘇州河を渡って虹口日本占領区に入ると、汪偽政府・日本軍部に親しいようにみられ、重慶国民政府に処分、暗殺される恐れがあるから、多くの知識人たちは仕方なく、蘇州河の「向こふ」(租界：筆者注)に足を止める。また、「敵性の濃い」「異郷」である租界の建物と他人事や政治に無関心な民衆に囲まれて、孤立無援になり、「孤島」の感をもつようになった、と豊島は考えた。しかし、それは上海にいる知識人を均質的に考えることから生まれる、会えなかった人々の心境に対するあまい推測である。

租界に住む知識人たちは一体どういう精神状況だったろうか。

作家王元化³⁶の回想によると、日本軍による「戒厳、封鎖、屈辱、思想的抑圧」のため「すっかり意気阻喪の状態に落ちこんでいた」³⁷知識人がいる。しかし、王元化自身は1938年に共産党に加入して、『奔流』という共産党系の雑誌の編集を務め、抵抗を徹底した。

よく政治の中立を保っていた知識人の一人として、フランス租界に住んで「日本の憲兵に敬礼することを避けるために」ほとんど「戸を閉じて出かかず、東は黄浦江ま

35

趙夢雲 「戦争末期上海邦人文学活動を把握するキーワード——同人誌「上海文学」一瞥」(日本近代文学会2010年秋季大会パネル発表、2010年10月24日)

36

王元化(1920-2008)、文学理論家、評論家、作家。1938年の年初中国共産党に加入し、1941年中国共産党の上海にある地下組織の総支部委員を担当した。

37

「当時(日本部分的占領時：筆者注)上海は敵(日本侵略軍をさす：筆者注)の手に支配され、戒厳、封鎖、屈辱、思想的抑圧のために多くの人たちがすっかり意気阻喪の状態に落ちこんでいた。」王元化 『清園文存 第一巻』(江西教育出版社、2001年) P172、1945年書いたものである。翻訳は相浦泉による『ユニテ』(ロマンラン研究所、1981年)15号)。

38

謝天振、李小均『傅雷 那遠逝的雷火靈魂』(文津出版社、2005年)P20。前に述べたように、黃浦江とガーデンブリッジはフランス租界の東北にあるイギリス租界の勢力範囲の限界である。

39

傅雷(1908-1966)、フランス文学翻訳家。1928年フランスへ留学、1931年8月帰国してからは一生涯、翻訳に尽くす。ロマン・ロランやバルザックの作品を始とするフランス文学を大量翻訳して、『傅雷訳文集』15巻を残した。文化大革命が始まってから無実の罪で迫害され、自ら命を絶った。彼の故居は上海市静安区江蘇路284弄安定坊5号(現在のアドレス)にある。

40

方榮(主編)『『大公報』与現代中国——1926~1949年大事記実録』(重慶出版社、1993年)P305。翻訳、筆者。

41

王芸生(1901-1980)、有名なジャーナリスト、無党派。

42

文匯報史研究室(編)『文匯報史略:1938.1-1939.5、1945.8-1947.5』(文匯出版社、1988年)P3-4。翻訳、筆者。

43

上海社会科学院文学研究所(編)『上海“孤島”文学回憶錄 上』(中国社会科学出版社、1985年)P106。翻訳と傍点、筆者。

で、北はガーデンブリッジまでしか行かない』³⁸と云い自宅で翻訳の仕事に専念していた翻訳家傅雷³⁹がいる。

豊島が会えた人々のような日本に傾いた知識人が租界にいたのは否めない。しかし、彼らを租界全体の知識人の代表と見なして、租界の知識人の状況を推測しても結論が歪む可能性がたかい。孤島という単語に対する認識と現地とのズレがそのことを物語っている。

そもそも孤島という日本部分的占領下の上海の別称は、1937年12月14日の『大公報・上海版』の社説「国民党軍の撤退した上海は完全に孤島になった」⁴⁰という王芸生⁴¹編集長の感嘆による造語だった。国民党軍が撤退して、日々衰える欧米租界の勢力が次第に言論(特に抗日の言論)の自由を保護することができなくなり、(虹口日本占領区を含まない)租界は島のように孤立した。人々は孤島という語に託して、租界で日本と対抗する意志と孤立無援の感慨とを伝えたのである。

『文匯報史略:1938.1-1939.5、1945.8-1947.5』には、孤島について以下のような回想があり、狭義の孤島の範囲がはっきり書かれている。また、地図をみているような巨視的な捉え方と同胞に対する連帯感も注目するに値する。

日本軍が南市、閘北などの地区を占領し、漢奸蘇錫文と連携して浦東で「上海大道市政府」をなしても、上海の共同租界とフランス租界は依然として存在し、主に工部局、公董局の英人やフランス人の支配の下にある。この蘇州河以南の二百万以上の中華人民が住んでいる地区は、近代史上有名な孤島である。日本軍に囲まれても、江蘇、浙江、安徽、香港及び内陸地の水路や陸路となんらかの連絡がある。⁴²

『上海「孤島」文学回憶錄』においては孤島の存在を維持する欧米諸国の租界に感謝の意もある程度読めるだろう。

当時、抗日戦争が上海の郊外で一段落を告げ、上海は日本軍に占領された。ただし、租界は英米のおかげで、しばらく生き残ることができて、世界歴史上にも珍しい孤島になった。⁴³

普通の場合、陥落地は連続した土地であるが、上海には二つの租界の「領事裁判権」がなお保持され、租界は英米などの国の治下であり、日本によって陥落しなかった。そのため、陥落地に囲まれて第三国の管理におかれる地域が現れる。この珍しい光景はあたかも海に囲まれて、陸地と離れたところにある孤島のような。抗日志向の人々は租界にある欧米の言論の自由保護の政策によって、抵抗を最大限に宣伝していた。こういう意味で孤島は内陸地と連帯感が生まれる。つまり、内陸地にある抗日する重慶国民政府や共産党政権=陸地、から遠く離れても同じく水に覆われず、租界を囲む淪陷区の日本軍・日本勢力=海、と対立したという考えによってはじめて、孤島というメタファーが成り立つ。

欧米の租界が内陸地と同じ立場になるのを認め、欧米の抗日言論の保護を感謝する

現地の考えと違って、租界にいる知識人は英米を「日本に対する敵性の濃い」(96頁)地域、英米などの国の租界にある娯楽場を「俗悪極まるもの」と考え、租界に対する抵抗感を示す、と豊島は想像する。

ところで、欧米を敵視するのは一体誰だろうか。前述したように、実際、抵抗を養成する重慶国民党系、共産党系の知識人は欧米の租界が彼らの言論の自由をある程度保護していたから、租界を敵として見るわけがない。しかも、1940年の中英・中米関係は日米関係ほどは悪くなく、さらに一年後の1941年には、日本が英米に宣戦し、中国が英米の同盟国になった。こう考えれば、英米を敵視するのは日本人や日本に傾く汪偽政府の知識人としか考えられない。それゆえ、豊島が想像した、租界にいた知識人の実質は彼と実際会ったことのある日本に傾く知識人、さらに彼自身にすぎない。

英米を敵視すると同時に、租界における欧米の勢力を「東洋文化を軽蔑圧迫せんとする或種の気風」(101頁)と豊島は見るとする。そのことから、中国が日本と同じく「東洋」⁴⁴に属し、英米などの国がそれと対立した「西洋」と見る豊島の日本的な把握の仕方が明らかになる。さらにその後ろには中国を含む「東洋」の連帯思想と「東亜協同体」理論の影が見られるのではないか。

租界に対する感情を比べた上で、豊島のいわゆる孤島に注目しよう。「上海の洪面」で「孤島」は三回言及されたが、二回とも文化的という限定語によって修飾される。

彼等の胸には、文化的「孤島」上海の感が響いて来るに違ひない。(98頁)

上海は前述のやうな文化的孤島の現状であり、その文化人は前述のやうな状態であるとするならば、その上なほ、東洋文化を軽蔑圧迫せんとする或種の気風が其処に巢喰つているとするならば、如何にしてこれを新たに明朗に建て直すべきであらうか。(101頁)

たゞ「孤島」に於ける孤独の感じは如何ともし難いだらう。(99頁)

豊島は上海の現状を「文化的孤島」で、上海にいる文化人の状態を「孤独」とまとめる。前に述べたように、当時の上海には「思想文芸の能才は甚だ少」かった。多くの知識人は「奥地に遁入」したか、「市内に潜んで」(97頁)見つかることができなかった。豊島の目の前に現れる知識人も「過去の信条が崩壊して未だ新たな確信を掴みきつてゐない悩み」を持ち、「孤独の影がさしてゐるらし」(96頁)い。こういう知識人がいる上海は文化活動が一切停滞していた。加えて、租界の「東洋文化を軽蔑圧迫せんとする或種の気風」の圧迫があり、無関心の民衆に囲まれ、知識人の孤独はいっそう際立たせられる。おそらく、豊島はこういう何重もの「孤独」を抱く知識人が自分の居場所を孤独の島、即ち孤島と命名したと思ひ込んだのだろう。それだけではなく、こういう苦境は知識人、文化の面から見たものだから、豊島は孤島に「文化的」というレッテルを貼った。

豊島は租界において、日本と対立していた欧米勢力を見出し、孤島を文化的貧しいところと理解し、さらに欧米勢力の圧迫は租界が孤島になる要因と考えた。この字面から、日本的な背景をもって解釈される孤島は現地の文脈にある孤島と比べると、大きなズレがみられる。つまり、豊島のいわゆる孤島は「孤独」の側面に重きをおき、

44

「東洋」という単語は時に中国を指し、時にアジアを指す。例えば、中国史を「東洋史」と呼ばれた時代があった。アジアを指す時も、日本を含むアジアと日本を含まないアジアという二つの意味がある。前者の例としては「日本は…他の東洋の国々も…(省略:引用者)」(谷川徹三「東洋と西洋」(『中央公論』、1938年11月号)P5)、後者の例としては今でも多く使われる「東洋史学」などが挙げられる。この曖昧性・多義性の単語の具体的な意味を分析することは知識人の立場を知るいい手がかりである。

すでに述べたように、豊島は戦前戦中に四回も中国を訪れたが、戦後は中国に行っていない。それにも関わらず、1949年、豊島は内山完造らとともに「日本中国友好協会」を作った。中国に対して一貫した関心を示すが、戦時中の日本軍部や中国偽政府と関りがあるので「罪責感」を持つ日本知識人と比べると、中国の政権交代を無視して日中友好を求める姿勢はどうしても理解できないところがある。この謎をとくには、資料を発掘する必要があるが、残念なことに、二つに分裂した「日本中国友好協会」は豊島与志雄を忘れたようで（永淵道彦『豊島与志雄への測鉛』（前掲））、研究の停滞が懸念される。

孤島という語に隠された対立を日本・中国を含む東洋と欧米勢力の西洋と読む。その捉え方は周りが淪陥されても内陸地と同じ抵抗の立場をとったから租界を孤島と呼び、欧米を友にして、共に日本を抵抗する現地の考えとは正反対なのである。こういう誤解は豊島の日本的な考え方を暴く。

1938年重慶を脱出した汪偽政府及びその黒幕である日本軍部と、重慶国民政府と、さらに共産党とが争っていた中国の縮図とも言うべき上海で、豊島与志雄は共産党系の知識人どころか、重慶国民政府系や知識人とさえ話を交わすチャンスを得なかった。ところで、国民党と共産党は1937年日中戦争（抗日戦争）勃発後、「抗日民族統一戦線」を組み、日中戦争を最後まで遂行する決意をし、中国側を勝利に導いた。つまり、豊島が重慶国民政府系と共産党系の知識人を見逃して、彼らの精神状況を見あやまったことは、1945年の勝利へと続く「現代の中国」を見そこなったことにつながるのではないだろうか。⁴⁵

おわりに

本稿は豊島与志雄の紀行文、「上海の洪面」を中心に、彼の1940年に行った上海旅行の経緯、及び文中に現れる人名や固有名詞について調べ、豊島の目に映った上海を描き出した。彼は景色より、ひとに注目し、上海の一般民衆から知識人までを理解しようと努力した。結果として、彼は一般民衆の姿を描くのに成功したが、理解する術はなかった。知識人に至っては、豊島は何人かと会見できたが、彼らは多少日本側に傾きがあったのであり、上海に在住する知識人全体を代表しているわけではなかった。そのことを意識せず、豊島は租界に暮らす知識人の心境を想像した。しかし、彼の善意の想像と上海を見る目線には日本的なものが満ちている。日本側に傾く知識人の心境によって、上海全体の知識人の心境を推測することは、所詮ありえない。

「和平建国とか防共建国という上っすべりのお祭り行事に向かわず、現実の中国民衆と知識人の姿をしかと見つめよう」⁴⁶としても、孤島上海はこのオールドリベラリスト・インターナショナリストの限界を示した。からだ越境しても、豊島は日本的な考え方をもってしか異国を見ることができなかった。

中日両国の孤島という言葉が同じように陸地と海の対立関係事象を表すにも関わらず、豊島与志雄の紀行文における孤島と現地言論の文脈における孤島とは隔たりがある。このことは大きな意味をもっている。その隔たりは日本の東亜協同体という幻想と中国の抗日民族統一戦線という現実の大きな差異を明らかにするのである。